

歴史文化クラブ 2019年7月度研修会
— 唐古・鍵遺跡から纏向遺跡へ —

1. 実施日： 令和元年7月24日（水） 雨天実施

2. 集合場所： JR三輪駅前 9：10 集合

3. 行程・スケジュール

JR三輪駅⇒ 桜井市埋蔵文化財センター ⇒ 箸墓古墳 ⇒ 纏向遺跡

⇒ (JR 卷向一桜井) ⇒ (近鉄桜井一田原本) ⇒

⇒ 唐古・鍵考古学ミュージアム ⇒ (解散) (希望者) 唐古・鍵遺跡

⇒ 近鉄岩見駅解散 (16：30 予定)

4. 資料

- ① 箸墓古墳と邪馬台国
- ② 纏向遺跡
- ③ 唐古・鍵遺跡
- ④ 参加者名簿
- ⑤ 地図 など

奈良・人と自然の会

歴史文化クラブ

担当世話人： 田代一行 田積彰男 中井 弘
(事務局： 中井 弘 Tel 090-2381-1122)

纏向遺跡と唐古・鍵遺跡探訪タイムスケジュール

実施日： 7月24日（水） 雨天実施
集合： JR三輪駅前 09:10
路線： ①近鉄西大寺（急行8:05）⇒近鉄天理（8:27着）→JR8:51乗換
②JR奈良（8:34）⇒JR天理（8:51）⇒JR三輪（9:02）

コースとコースタイム

JR三輪駅発 （点呼・挨拶・トイレ） （歩10分）	9:20 出発
桜井市埋蔵文化センター （学芸員解説60分） （歩15分）	9:30～10:30
箸墓古墳 （担当 中井） （歩15分）	10:45～11:15
纏向遺跡 （担当 田積）	11:30～12:00
昼食（45分）	12:00～12:45
JR巻向駅⇒桜井駅 （乗換12分）	13:00⇒13:06
近鉄桜井駅⇒大和八木 （乗換22分）	13:18⇒13:25
近鉄大和八木⇒田原本 （歩20分）	13:47⇒13:53
唐古・鍵考古学ミュージアム （学芸員解説60分） （歩20分）	14:20～15:20
唐古・鍵遺跡 （担当 田代） （歩20分）	15:40～16:10
近鉄岩見駅解散	16:30 到着予定

メモ

16時台西大寺行き 岩見駅発時刻 :19. :24 :29. :40 :54

世話人：田代・田積・中井

箸墓古墳と邪馬台国大和説

by 中井弘

1、「魏志」倭人伝について

魏志倭人伝は 2～3 世紀当時の日本の状況を知るためのただ一つの基本資料である。「魏志倭人伝」の 1988 文字の記述がなければ、邪馬台国も卑弥呼も倭の大乱も、歴史のかなたに永遠に消えていた。奇跡的に残された世界で唯一の記録である。

中国西晋王朝の陳寿が、大康年間（280～289）にまとめた魏・蜀・呉の三国に関する「三国志」のうちの「魏志」東夷伝倭人の条、本文 2 千字ほどの中国正史。魏王朝は日本と深い交流があり、具体的・詳細に倭の状況を記録していた。

内容：1. 帯方郡（現在のソウル）から邪馬台国までの距離と周辺国に関する情報
2. 邪馬台国の人々の風俗・生活・習慣に関する情報
3. 魏と邪馬台国の外交関係についての情報

「邪馬台国」や「卑弥呼」という名は、8 世紀初めに書かれた日本の正史「日本書紀」や「古事記」には全く記載がない。わずかに「倭の女王」「倭国の王」という文字が神功皇后記に「魏志倭人伝」から引用されて書かれているだけである。われわれ現代人は、わが国の文献で魏志倭人伝の実相に迫ることができない以上、考古学により証明していくしかない。近年の発掘調査や科学的手法により多くのことが解明されつつある。

2、箸墓古墳（参考文献 福永伸哉・福辻淳・寺澤薫「2014 箸墓再考シンポジウム 基調講演」）

① 纏向遺跡の範囲内にあり 250 年代に築造された全長 280m の前方後円墳。

出現期の定型化したわが国最古・最大の前方後円墳である

- ・幅 10m の周濠、その外側に渡土堤、さらに外側に大規模な落ち込み（多量の土を得る為に掘削された外濠状遺構）が墳丘全体を取り囲んでいた。
- ・平成 10 年の台風被害の復旧工事で特殊器台形埴輪や土器などが採取され、最古期の前方後円墳であることが科学的分析の結果確定的となった。
- ・三世紀前半の 210 年代には、「纏向形前方後円墳」と呼ばれる墳丘長が 100m におよぶ前方後円形の纏向石塚古墳やホケノ山古墳などが出現する。しかし 250 年代になると、同地区に隔絶した大きさの箸墓古墳が成立する。この画期的で定型化した巨大な古墳をもって、古墳時代の始まりとする説が学界の主流となっている。

② 卑弥呼（没年 247 年頃）の墓か

- ・内庁によって「倭迹迹日百襲姫の大市墓」として管理。孝霊天皇の娘で大物主神の妻の陵墓と比定されていたが、築造が年代測定法で三世紀中ごろと特定されると、卑弥呼の没年と重なり、大きさが魏志倭人伝に記された卑弥呼の墓の記述と大よそ一致することから、卑弥呼の墓とする見解が支持されている。
- ・日本書紀には「昼は人が造り 夜は神が造った」という記述があり、大労働力を動員して昼夜兼行で造られたことが窺える。葺石や石室に使われた石材は二上山北麓の芝山の玄武岩とされ、人民によってリレー式に運ばれたとある。日本書紀に古墳造営が記された唯一の古墳である。
- ・2009 年国立歴史民俗博物館の研究グループが、前方部周濠から見つかった布留 0 式土器に付着した炭化物など 20 点を「放射性炭素 (C14) 年代測定法」で測定し、箸墓古墳の築造年代を 240～260 年と特定した。
- ・「魏志倭人伝」に記す、「卑弥呼以死、大作冢、径百歩（約 150 m）」の径百歩は、箸墓古墳の後円部に相当し箸墓の原型は築造当初は円墳だった可能性がある。

③ 膨大な労働力を要する箸墓古墳の築造

- ・多数の人間が直接の労力を提供しただけでは実現できない。そこには労働力の動員と管理、必要な物資の供給、高度な土木技術の獲得など、この時代にはそれまでとは質的に大きく異なる社会の組織化があったとされる。
- ・墳丘周辺部で特に注目されるのは周濠の存在であり、整備されたその姿は前段階の「纏向型前方後円墳」には見られないものである。周濠も含めた古墳の諸要素が、箸墓古墳の築造によって確立されたと言える。

④ 箸墓古墳は日本の国家形成過程において画期的存在

「墳丘規模の飛躍」

箸墓古墳以前の最大級墳墓であった「纏向石塚古墳」墳長 90m に対して、箸墓は 280m の巨大さで、その後 350 年にわたって 200m 以上という規模が倭の大王墳のスタンダードとなった。

「築造労働力の飛躍」

推定投入労働力は纏向石塚古墳が延べ 45000 人、箸墓は 135 万人と桁違いの差がある。労働力の動員規模や組織化、必要な物資の供給の点でもこの時代、質的に異なる仕組みが生まれた。

(メモ)

仁徳天皇陵（大仙陵）486m は大林組の試算によれば、2 人で 1 度に 60kg の土を運ぶとすると、15 年 8 か月で延べ 680 万 7 千人を要したと推定している。

「相似形墳が各地に登場」

纏向の地に定型化された巨大な前方後円墳が表れて以来、前方後円墳は全国各地で造られる。箸墓古墳の形を1/2、1/3、1/6に縮小した相似形墳が地方に広範囲に現れる。これは墳形設計図の共有、中央の大王と各地の地域エリートとの強い結びつきと同時に地位の上下関係が明確に表示されることになった。

「広域的な墳墓序列の成立」

支配者層の墳墓が巨大前方後円墳にほぼ統一され、中央の箸墓古墳を最上位とする墳形と規模の序列が地域間、地域内に形成された。

「墳墓要素の明確な共通性」

墳形だけでなく、堅穴式石室、木棺などの埋葬施設構造、三角縁神獣鏡、武器、農具などからなる副葬品の組み合わせ、埋葬頭位、水銀朱の多量使用など墳墓要素の共通性が生まれ、その中で質・量の格差が明確になっていった。

(メモ)

放射性炭素 (C14) 年代測定法：二酸化炭素中の C14 は、光合成によって植物に取り込まれ、食物連鎖で動物にも広がっていく。動植物の死後には C14 は新たに付加されない。(例：樹木の場合は内側の年輪が古く外側が新しいと測定される。

つまり動植物の内部における C14 の存在比率は死ぬまで変わらないが、死後は新しい炭素の補給が止り、その後放射線を出しながら規則正しく壊れていく性質を持っている。この性質で C14 の量の半減期は約 5700 年である。この測定法で年代測定が正確になり、世界中の歴史学・考古学で広く応用されている。

3、箸墓古墳から考える邪馬台国大和説

(参考文献：白石太一郎・近つ飛鳥博物館名誉館長「古墳出現期の筑紫・吉備・畿内」
・坂井秀弥・白石太一郎・橋本輝彦共著「邪馬台国からヤマト王権へ」
・大庭 脩 「邪馬台国の実像を追って」 など)

① 邪馬台国論争

邪馬台国の所在地論争は江戸時代からあり、明治時代になると内藤湖南(京都帝大)が畿内説、白鳥倉吉(東京帝大)が九州説を主張し、以後、2つの有力説が並立し現在に至っている。九州説をとる研究者は「邪馬台国東遷説」をはじめ「神武東征伝説」を説く。九州にあった邪馬台国が東遷してヤマト政権を樹立したことなど、さまざまな仮説を提起している。

邪馬台国所在地問題に関しては、「魏志倭人伝」の記載には資料的に大きな限界があり、多くの状況証拠を提供できる考古学が邪馬台国に関わる諸問題解決のキャストイ

ングボードを握っているといえる。

最近では、三世紀中葉の纏向の地に、定型化した大型前方後円墳「箸墓古墳」が出現したとする研究者が多く、邪馬台国の所在地論争もおのずから大和説に決着して、ほぼ解決したように見える。その根拠は三世紀中葉がまさに卑弥呼の没した時期にあたること、定形型前方後円墳が近畿で成立し各地に広がったこと、卑弥呼が魏王から下賜されたとされる三角縁神獣鏡百枚を含む数百枚の銅鏡が近畿を中心に発掘されていること、纏向遺跡の考古学の成果などが根拠となっている。

② 大和で定型化した前方後円墳を築き始めた勢力こそが邪馬台国だった。三世紀中葉過ぎから全国に広がって約 350 年間造られ続ける。

これら前方後円墳はそれぞれ勝手に造られたのではない。大和の勢力を中心に西日本各地から瀬戸内海沿岸・列島各地を経て北部九州、に至る地域の政治勢力によって形成されていた「ヤマト政権」と呼ばれる政治連合に加わった各地の首長たちが、その首長連合の中での身分秩序に応じて、大小さまざまな前方後円墳を造っていった。

③ 大型前方後円墳と倭国王、

纏向遺跡を中心として南北に墳長が 200m から 300m クラスの 6 基の大きな前方後円墳が点々と営まれていた。箸墓・渋谷向山・西殿塚・行燈山・桜井茶臼山・メスリ山古墳である。そのうち最古のものが箸墓古墳で 3 世紀中ごろ、一番新しいのが渋谷向山古墳 4 世紀中ごろで、大体 100 年ほどの間に、それぞれ時期が少しずつずれて、造られている。

この時期日本列島内でこれほど大きな前方後円墳はどこにも造られていない。この 6 基は間違いなく、後に大王や天皇と呼ばれることになる初期の倭国王の墓である。一番古い箸墓が 250 年代終わりごろのもので、年代的にも卑弥呼の墓である可能性が高い。二番目に古い西殿塚古墳は卑弥呼の後継者である「台与」の墓と考えられる。最後の二代の行燈山古墳は崇神天皇、渋谷向山古墳は景行天皇である蓋然性が極めて高い。

4、卑弥呼からヤマト政権へ

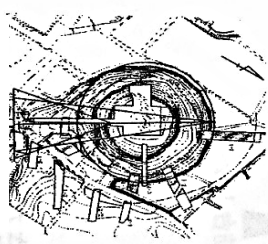
初代の卑弥呼の生きていた時代、邪馬台国の東方に狗奴国連合という政治的まとまりがあり、両者はまだ統一されていない。

卑弥呼が亡くなるのと時を同じくして狗奴国連合と邪馬台国連合が合体して、ヤマト政権と呼ばれる新しい政治連合が出来上がる。卑弥呼の死を契機として初期ヤマト政権が成立し、箸墓という新しい定型化された前方後円墳が生み出されたといえる。

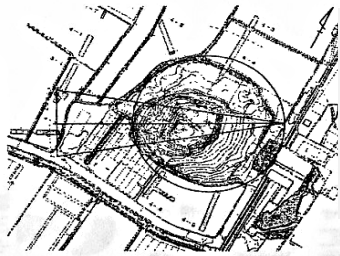
以上

纏向遺跡における「纏向型」から「定形型」への移行

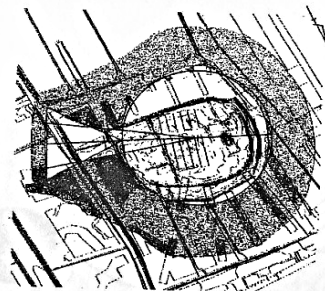
纏向型



ホケノヤマ古墳



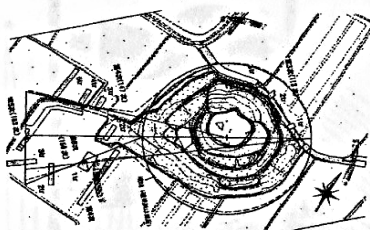
矢塚古墳



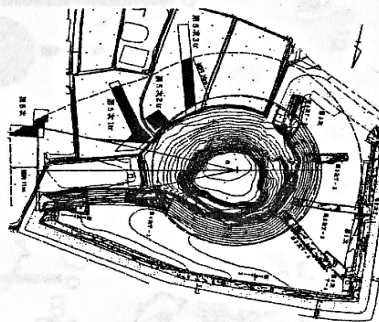
石塚古墳



東田大塚古墳



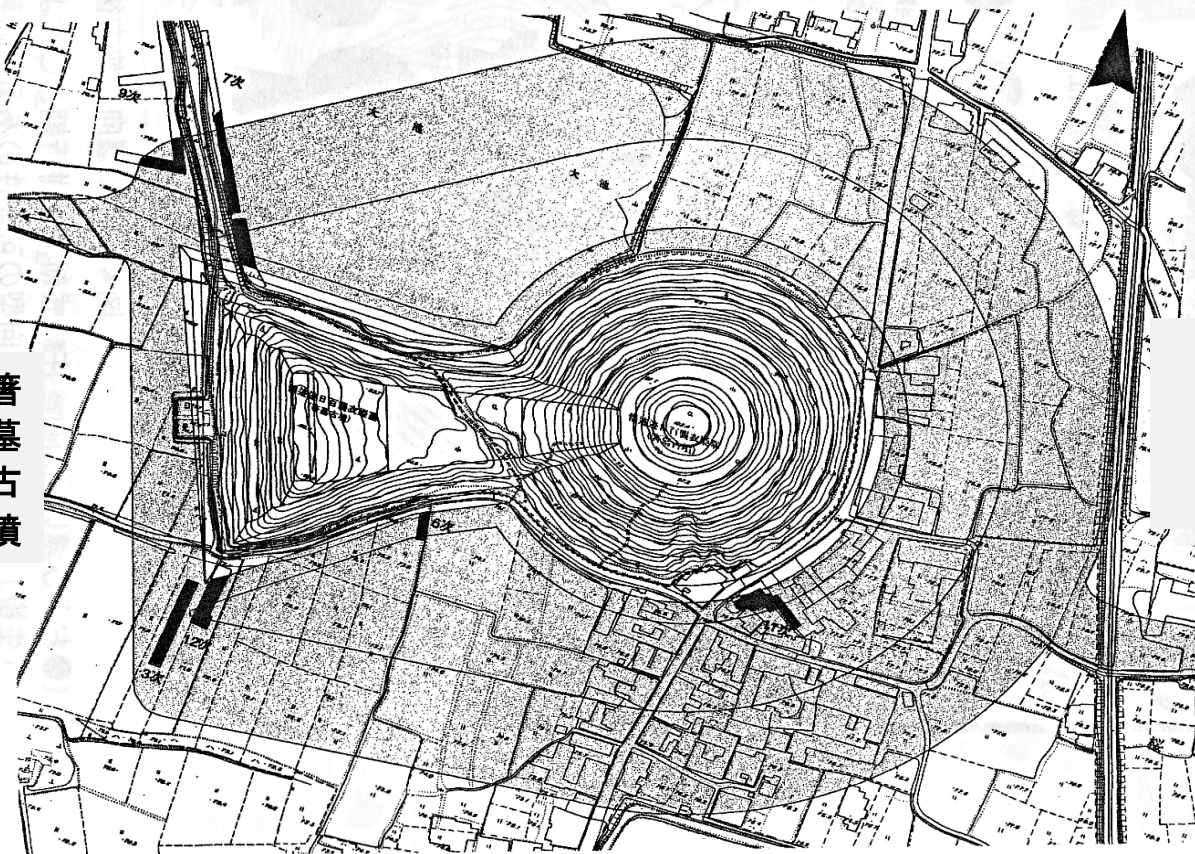
定形化



勝山古墳



箸墓古墳



定形型

纏向遺跡

by 田積

1、纏向遺跡とは

奈良盆地東南部の三輪山西側に広がる東西約2キロ、南北約1・5キロの弥生時代末期～古墳時代前期の遺跡。卑弥呼の墓との説がある箸墓古墳など最古級の前方後円墳が点在し、ほぼ東西に方位をそろえて並ぶ神殿のような建物跡も出土。関東から九州まで各地の土器が出土し、運河が縦横に走るなど都市機能を備えていたとされる。自然集落ではなく、人工的に造られた「日本初の都市」と言われる。

2、纏向遺跡の主な遺構

奈良県桜井市辻・太田・東田。巻向山に発する巻向川が形成した扇状地一帯に占地する大集落遺跡。川に区切られた自然堤防ごとに単位となる集落が営まれた。

1971年以来、橿原考古学研究所および桜井市教育委員会による数次にわたる調査が実施され、祭祀にかかわる巨大な土坑群、それに伴う仮設建築物、矢板列の護岸工事・集水施設を伴う幅5mの大溝2条等が検出されている。

出土した多量の土器は弥生後期～古墳前期の編年指標となっただけでなく、異常に高い比率で他地域から搬入された土器を含んでおり、東海や九州に及ぶ広範な地域間交流をうかがわせ、当地の首都的な機能が想定されている。大和政権の成立基盤を考える上で最も重要な遺跡である。

3、辻地区の建物群

辻地区において検出(2009年)された掘立柱建物と柱列からなる建物群で、纏向遺跡の居館域と考えられる。このうち中心的な大型の建物は4間(19.2m)×4間のもので当時としては国内最大規模である。

近年実施された168次調査では建物群の廃絶時に掘削されたとみられる4.3m×2.2mの大型土杭が検出され意図的に壊された多くの土器や木製品のほか多数の動植物の遺存体などが出土しており、王権中枢部における祭祀の様相がうかがえる。



4、纏向遺跡で見つかった主な遺物

① カエルの骨

出土したカエルの骨を分析したところ、カエルが何らかの祭祀に利用された可能性のあることが分かった。カエルは古代日本列島や中国王朝で神事や食用に使われるケースがあったとみられ、専門家は纏向遺跡でもカエルが神に供えられた可能性を指摘する。

② ベニバナ花粉

V字溝の埋土から検出されたもので国内では最古の事例となる。ベニバナの用途は染料や漢方薬、紅などが考えられるが、纏向のものは花粉量の多さから溝に流された染料用の廃液に含まれていたものと考えられる。ベニバナは本来日本には自生しない植物で、当時の最新技術を持った渡来人とともに伝来したとみられる。

③ 桃のタネ

遺跡の3世紀に掘られた穴「土坑」から桃のタネ約2,000個が見つかった。桃の実は古代祭祀においては供物として使われており、1ヶ所で出土したタネ数としては国内最多である。

5、邪馬台国の所在地を決める考古学上の証拠は、いったい何か。

卑弥呼の授かった「親魏倭王」の金印が発見されれば決め手となるが、現実に発見可能なのは、次の「卑弥呼の三大遺産」であろう。

①「卑弥呼の鏡」 239年(景初3)魏帝から賜ったとされる百枚の三角縁神兽鏡かは不明だが、黒塚古墳で33枚など大和を中心に550枚が出土する。しかし中国や半島では一枚も発掘されておらず、中国渡来人による日本製とする説もある。因みに、その同范鏡の製作地としては、田原本町の「鏡作坐天照御魂神社」周辺がとも言われている。

②「卑弥呼の宮」 王都の中心にある宮殿 纏向遺跡が最有力。

③「卑弥呼の墓」 卑弥呼没年が247年ごろ。「径百余歩」の箸墓古墳が最有力。

以上

唐古・鍵遺跡

b y 田代一行

1、歴史・立地

約 2000 年前の弥生時代に存在した日本最大級のムラで幾重もの環濠に囲まれた集落の遺構で、弥生時代前期から後期まで継続する国内屈指の弥生集落跡および墓域。この地は寺川と初瀬川に挟まれた標高 47~49mの沖積地上に立地し、遺跡の範囲は南北約 800m、東西約 650m、総面積約 30 万平方メートルと推定される。(甲子園 10 個分)。

弥生時代前期~後期まで約 700 年間途切れずに集落として存在しており、弥生時代の研究にとって非常に重要な遺跡であることから、平成 11 年に国の史跡に指定されている。

集落は直径約 3~5 条の多重環濠が巡っており、環濠帯の幅は 150~200mある。

2、遺跡発掘調査

当初は地元、唐古在住の飯田松次郎と恒夫親子が池周辺の採集と、その後、桜井市出身の代用教員、森本六爾の一片の土器の研究から始まる。いずれもまだ試掘程度であり、現在では 1936、37 年(昭和 12 年)を第一次の発掘調査としており、本格的な調査は国道 24 号線の道路計画と並行して土の搬出工事と発掘調査が同時におこなわれた。唐古池はもともと農業用の溜池で傾斜地のため深く掘る必要がなく、池築造に当たっては、池底にあたる江戸時代の耕作表土層 30 センチ程度を掘り下げるだけで、弥生時代の遺構の大半が破壊されずにすんだ。

その 6 年後、調査担当の檀原考古学研究所長・末永正雄と補助者・小林行雄らの報告書で「唐古第一様式から唐古第五様式」として弥生土器の編年を確立。この弥生土器編年は今日の近畿地方の土器の基礎となり、弥生研究者の座右の書となっている。すでに調査回数は 125 次となり、現在も継続されている。



3、遺構・遺物

検出された遺構には、環濠を形成する大溝、集落内区画溝、掘立柱建物、竪穴住居の柱穴、土抗、木器貯蔵穴、井戸、青銅器制作工房に関わる炉跡、方形周溝墓、木棺

墓などがある。特筆すべき遺構の1つに2棟の大型掘立柱建物があり、その柱穴内から直径約60cmの檜製の柱が出土した。

出土遺物には土器(河内や吉備より搬入)、石器類、(石鏃・石剣・石槍・石小刀・石包・磨製石斧)、木製農工具、猟銃具、容器類、建築部材、骨角器、金属器類、(銅鐸破片・細形銅矛破片・銅鏃・巴形銅器・素文鏡・鉄斧)、紡織具類、木製祭祀具、勾玉(新潟採取のヒスイ)、管玉、卜骨、絵画土器、動植物遺体などがある。

特筆するものとして、銅鐸鑄型をはじめとする、青銅器鑄造関連遺物や硬玉製の大型勾玉、管玉、鞘入り石剣、約250点の絵画土器などがある。

4、遺構・遺物から見えてくるもの

楼閣：1992年に復元された楼閣は、それまでの弥生時代は「登呂遺跡」にみられるような牧歌的な農村のイメージとは大きく異なり、唐古・鍵遺跡のシンボルでうずまきの屋根飾りを持つ、個性の建物。発掘された絵画、土器には2層以上の構造を持つ建物が描かれており、弥生時代にも高層建築があったという事がわかる貴重な発見で、中国風の楼閣の絵画が見られ、大陸とのつながりの可能性も考えられるが、当初は本当に弥生時代に存在するのかという懐疑心もあったようで、現在は弥生時代の復元建物として認知されている。



大陸との稲作ルート：大和川遡上の最初にたどり着く地が唐古・鍵になり、農耕文化と技術を携えてやってきたのでは、(渡来系の人骨出土)。学者の試算では最盛期の人口は900人くらいで国内最大級の弥生集落といえる。

二棟大型建物跡：首長の館、神殿、集会場、倉庫などの説がある。

多重環濠：低地に立地するため、争乱のみならず平和時には運河としての機能であり、最も重要な機能はムラを洪水から守るため、水を集落の周囲に迂回させるとともに排水機能があったと考えられる。



広域交流を示す土器：唐古・鍵遺跡には海産物、魚介類、装身具などさまざまな物が運ばれているが、中でも特に目につくのが土器であり、当地制作の土器と他地域から運ばれてきた土器が容易に識別でき、東の土器は遠江(静岡県)、信濃地域(長野県)、尾張地域、西は北部九州、吉備(岡山県)、播磨(兵庫県)がある。近畿地方の河内・摂津、近江(滋賀県)、紀伊(和歌山県)などの土器は恒



常的にみられる。特に吉備の大型壺と大型器台は供献用一組として、祭紀面での強い関係を示す重要な遺物になる。

5、唐古・鍵遺跡の誕生と終焉

「ヤマト王権誕生の礎となったムラ・ 唐古・鍵遺跡」の著者、藤田三郎氏(田原本町埋蔵文化財センター長)によると出土した人骨が渡来系だったことなどを根拠に稲作技術を持つ人々が紀元前5世紀頃にムラをつくったとの見解を示し、その後2世紀後半、ムラは広範囲に及ぶ洪水に見舞われ、環濠が徐々に埋没。このような社会不安の中で拠点集落が東の纏向に移動したと推測しており、従来の社会構成ではムラの維持が困難になり、上層部の人々が纏向に移動してムラを解体した。そして唐古・鍵の人々が築いた文化が継承されたからこそ、この地にヤマト王権が誕生したと結んでいる。

7月歴史研修会 参加者名簿

2019, 7, 24

番号	お名前 (敬称 略)	出席確認	備考
No.1	青木 幸子		
No.2	阿部 和生		
No.3	池田 信明		
No.4	内河 洋文		
No.5	太田 和則		
No.6	小田 進八郎		
No.7	川勝 孝雄		
No.8	田代 一行		担当世話人
No.9	田積 彰男		担当世話人
No.10	田中 善英		
No.11	坪井 都子		
No.12	徳地 恵男		
No.13	戸田 博子		
No.14	永井 幸次		
No.15	中井 弘		事務局
No.16	中川 徹		
No.17	羽尻 嵩		
No.18	坂東 久平		
No.19	福田 美伸		
No.20	古川 祐司		代表
No.21	松尾 弘		
No.22	森 英雄		
No.23	森田 展正		
No.24	八木 健彦		
No.25	吉川 利文		
No.26	吉川 公子		